

特集：ウェルビーイングの哲学

鈴木 貴之

よい生とは何か。われわれは、どうしたらよい生を送ることができるのだろうか。これらは、誰にとっても重要な問いである。哲学者も例外ではない。古代ギリシア哲学におけるもっとも重要な問題は、よく生きるということだった。現代の哲学では、よい生のあり方を表す言葉として、ウェルビーイング (well-being) という語を用いることが一般的となっている。古代ギリシアの問題関心は、ウェルビーイングの哲学として、近年再び注目を集めている。

現代のウェルビーイングの哲学には、3つの主要な立場が存在する。快樂説は、あるものがある人のウェルビーイングを高めるのは、それが広い意味での快樂をもたらすときだと考える。たとえば、高級レストランでの食事がウェルビーイングを高めるのは、それが快の経験をもたらすからである。欲求充足説は、あるものがある人のウェルビーイングを高めるのは、それがその人の欲求を充足させるときだと考える。たとえば、高級レストランでの食事がウェルビーイングを高めるのは、それが高級レストランで食事をしたいという欲求を充足させるからだと考え。客観的リスト説は、あるものがある人のウェルビーイングを高めるのは、それが一定のリストに含まれる特徴を備えているからだと考え。たとえば、高級レストランでの食事がウェルビーイングを高めるのは、それが新たな経験や美的経験といった特徴を備えているからだと考え。

では、いずれの説が正しいのだろうか。これは、現在まで論争が続いている重要な問題である。そして、ウェルビーイングとは何かをあらためて考えようとする、ほかにもさまざまな重要な論点が浮かび上がってくる。ウェルビーイングと道徳的価値や美的価値はどのような関係にあるのだろうか。ウェルビーイングは万人にとって普遍的なものなのだろうか。これらの問いである。

信原論文は、ウェルビーイングとは何かという問いに関連する多様な論点を一つ一つ丹念に検討することを通じて、ウェルビーイングに関する一つの整合的な見方を提示することを試みている。信原は、よい生には経験が不可欠であるということを確認しつつ、そこには十分な情報や適切な価値観といったさらなる制約が存在することを指摘し、ウェルビーイングが主観的な側面と客観的な側面を併せもつことを明らかにする。信原によれば、何がよい生であるかは、一人一人のあり方によって異なる主体相対的な問題だが、同時に、その人の客観的なあり方によって決まる客観的な問題なのである。

鈴木論文もまた、ウェルビーイング（鈴木が個人的価値と呼ぶもの）に関する一つの整合的な見方を提示する試みである。鈴木は、個人的価値は、自然的性質または自然的性質から構成された性質として理解可能であり、個人的価値についての言明は、経験的に真偽を判定可能な客観的な事実の記述であると考え、自然主義的实在論を擁護する。鈴木は、個人的価値に関してはおおまかな合意が存在すること、個人的価値は操作可能であること、自然主義的实在論によって規範性や直観への依拠が説明可能であるといったことから、個人的価値に関する自然主義的实在論は有望な見方であると主張する。

信原論文と鈴木論文において興味深い点は、両者がそれぞれの仕方で価値の实在論を擁護しているという点である。ある物事が私にとって価値があるのは私がそれに価値を見出しているからだというのは、一般的にも広く受け入れられている考え方だと思われる。しかし、話はそれほど

単純ではないかもしれないのである。他方で、両者も指摘するように、ウェルビーイングに関する実在論は一つの重要な問いを提起する。私にとって何がよいかは私の考えと独立に決まっているとすれば、私にとって何がよいかに関して私は誤りうることになる。このような可能性は、どの程度認められるのだろうか。これは、教育や政策を考える上でも重要な問題だろう。

ウェルビーイングをどのようなものとするにせよ、具体的に何がわれわれのウェルビーイングに貢献するのかということもまた、重要な問題である。衣食住がウェルビーイングに貢献することは自明かもしれないが、自然科学を学ぶことやオペラを鑑賞することがウェルビーイングに貢献するのだろうか、それほど自明ではないかもしれない。

植原論文は、認識とウェルビーイングの関係という、これまであまり論じられてこなかった問題を考察する。植原は、認識論における徳認識論や、そこからの展開として近年注目されている悪徳認識論が、認識とウェルビーイングの関係を考える手がかりとなることを明らかにする。しかし同時に、個人の知的悪徳が集団全体としては真理貢献的となるという逆説的な事態が生じることを植原は指摘する。従来のウェルビーイングの哲学は、おもに個人のウェルビーイングを問題にしてきた。しかし、人間は社会的存在である。社会という次元を視野に入れることで、ウェルビーイングの哲学にどのような展開が生じるかは、今後検討すべき重要な課題だろう。

松浦論文は、知性とウェルビーイングの関係を古代ギリシア哲学の観点から考察する。松浦によれば、プラトンにおいてもアリストテレスにおいても、知性は幸福にとって中心的な役割を果たすと考えられてきた。しかし、知的素養には大きな個人差があることを考えれば、このような見方は現代のわれわれには受け入れることが困難なものかもしれない。松浦は、知性に恵まれない者にも開かれた幸福の可能性を検討し、その一つの可能性として、性格による幸福という考え方を提示する。幸福にとって重要なのは知性なのか、あるいはそれ以外の何かなのかという問いもまた、ウェルビーイングを考える上で重要な問題である。

現代社会に生きるわれわれがウェルビーイングの問題を考える上では、現代社会の多様な活動とウェルビーイングの関係も重要な論点となる。

飯塚論文は、美的エンハンスメントを具体例として、テクノロジーとウェルビーイングの関係を考察する。飯塚はまず、美的エンハンスメントは美容整形だけでなく、多様な実践を含みうることを指摘する。つぎに、美を追究する実践には構造的な抗いがたさがあり、美的エンハンスメントをめぐる論争において、慎重派は必然的に不利な立場に置かれることになることと論じる。飯塚は、この構造を克服するためには、美の理想の多様化が必要であると主張する。ここにおいてもまた、個人にとっての短期的なウェルビーイングと、社会全体としてのより長期的なウェルビーイングの間に緊張関係が生じているのかもしれない。

今日では、ウェルビーイングという言葉は哲学や心理学を超えて広く流通している。しかし、ウェルビーイングという言葉は、さまざまな場面でさまざまな意味合いで用いられ、そのことがウェルビーイングをめぐる対話を困難にしている。**渡邊と鈴木**の対談では、このような違いを乗り越えて、テクノロジーを活用してウェルビーイングを高める可能性を検討することが試みられている。ここで興味深いのは、渡邊が身体性に注目している点である。同じビデオチャットのようなコミュニケーションでも、身体性の有無が大きな違いをもたらすというのである。このような具体的なテクノロジーの水準におけるウェルビーイングの問題は、哲学者がこれまで見落としてきたものであるように思われる。

一連の論文からは、今後ウェルビーイングについて考えていくためのいくつかの教訓を得ることができるだろう。第一に、ウェルビーイングという語の多義性に注意することが重要である。たとえば、エンジニアはウェルビーイングを幸福感という意味で用いるかもしれないが、哲学者は、幸福感はウェルビーイングの構成要素の一つにすぎないと考えるだろう。したがって、異分

野間でウェルビーイングについて論じる際には、ウェルビーイングということによってそれぞれが何を考えているのかを明確にし、議論のすれ違いを防ぐことが、実りある対話のために重要となる。

第二に、現代社会におけるウェルビーイングをめぐる問題には、さまざまな要素が複雑に絡み合っている。たとえば、美的エンハンスメントの問題においては、エンハンスメント一般の問題と美的理想をめぐる問題、さらには消費社会の問題などが複雑に関係し合っている。ある技術や制度がわれわれのウェルビーイングを高めるかどうかという問題を考える際には、複雑に絡み合った要因を丹念に解きほぐす作業が不可欠となる。

第三に、哲学者の従来に関心は、ウェルビーイングとは何かという問題に集中しており、どうしたらウェルビーイングを高めることができるのかということは、哲学においてはこれまで十分に論じられてこなかった。しかし、植原論文が論じている科学者共同体の諸制度や飯塚論文が論じているエンハンスメント技術など、現代社会にはウェルビーイングの向上につながりうるさまざまな手段が存在する。そしてその有効性に関しても、社会心理学や行動経済学などの経験的知見が蓄積しつつある。それらの経験的知見をふまえて、ウェルビーイングの高い社会のあり方を具体的に構想していくことは、哲学者が他領域の研究者とともに今後取り組んでいくべき重要な課題だろう。

*本特集は、JST/RISTEX 研究開発プロジェクト「自律機械と市民をつなぐ責任概念の策定」および「人と情報テクノロジーの共生のための人工知能の哲学 2.0 の構築」による活動の成果の一部である。